

國學院大學學術情報リポジトリ

考古学から見た三嶋神・三嶋大明神と『三宅記』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-03-15 キーワード (Ja): 三嶋神, 三嶋大明神, 三宅記, 考古学 キーワード (En): 作成者: 深澤, 太郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001465

考古学から見た三嶋神・三嶋大明神と『三宅記』

深澤 太郎

一、はじめに

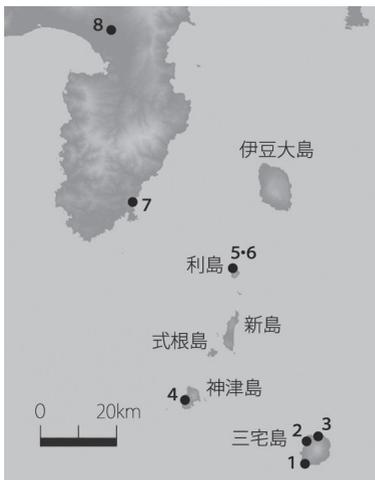
伊豆国三宅島の島長にして神主である壬生家、新島の前田家、そして白濱神社の原家などに伝わった『三嶋大明神縁起』、通称『三宅記』は、葉師如来を本地とする三嶋大明神の縁起物語であり、大明神による伊豆諸島の創造や、大蛇退治の物語と共に、壬生家が大明神の「御代官」となった由来が語られている（三橋一九七八、土岐一九八一ほか）。諸本の内、新島の前田家本に文明十三（一四八一）年の奥書が認められることから、その原本は遅くとも十五世紀中葉までに成立していた可能性が高い。このような『三宅記』は、もとより歴史的事実を記録した文書ではないが、一般の唱導文芸とは趣を異にしており、壬生家を中心とする三宅島の祭祀・政治と不可分な関係にあったことが知られている（阿部二〇〇〇・二〇〇一）。つまり『三宅記』は、中世の三宅島や伊豆地域において共有されたローカルな

世界観と、考古資料や文献史料から窺われる歴史的事実との接点を見出す上で、いわば「民俗誌」的な役割を果たすことができるのである。換言すれば、伊豆諸島・半島における祭祀考古学研究から、『三宅記』成立の背景について探っていくことも不可能でない。

そこで本稿では、『三宅記』の成立事情について考古学的な観点から検討を及ぼすことを目的として、噴火造島の神である古代の三嶋神や、中世以降の三嶋大明神に縁のある社堂の内、その淵源を物語る埋蔵文化財が境内に認められる事例を取り上げ、三嶋信仰の祭祀空間が形成・展開されていく具体的様子を点検する。その中で、考古資料から窺われる祭祀行為の実態と、『三宅記』に描かれた世界観の相関関係について、少しく検討を加えていくことにしたい。

二、三嶋神・三嶋大明神関連社堂の境内遺跡

三嶋大明神・后神・御子神や、大明神と御子神の本地薬師如来、后神の本地観音菩薩などを祀る社堂は、伊豆地域を中心に数多く営まれている。もともと、古代・中世に遡る三嶋信仰の場もあれば、後に移転、或いは新たに勧請された社堂も存在するため、全ての社堂境内に埋蔵文化財が包蔵されているわけではない。また、現在の社堂には、神仏分離や神社合祀の影響を受けて、かつて存在した三嶋信仰の姿が見えにくくなっている事例もある。



- 1：富賀神社、2：薬師堂、3：御笏神社、
4：物忌奈命神社、5：阿豆佐和氣命神社、
6：堂ノ山神社、7：白濱神社、8：三嶋大社

第一図 三嶋大明神関連社堂境内遺跡

従って、今日の信仰と考古資料を単純に結びつけて解釈することは避けるべきであり、社堂の由来と埋蔵文化財の相関関係については、前近代の様子を入念に検証しておく必要がある。このような視点から、関連する神社境内遺跡や、本地薬師如来を祀る薬師堂境内遺跡を渉猟すると、伊豆諸島の三宅島・神津島・利島や、伊豆半島の白浜・三島に好事例を見出すことができる(第一図)。

(一) 三宅島の遺跡

富賀神社境内遺跡・富賀浜遺跡

富賀神社は、東京都三宅村南西部の阿古地区「富賀山」一帯を境内とし、式内社の阿米都和気命神社や、『三宅記』に見える三嶋大明神の「あこ」の「宮」に比定される。降って、安永五(一七七六)年銘の棟札や、弘化三(一八四六)年の『島明細帳』などによれば、三嶋大明神・富賀大明神・東國大明神が本社に、大明神の眷属神として『三宅記』でも活躍する壬生御館・劔・若宮・見目が境内社に祀られていたことが判る(伊木一九五八)。また、拝殿裏の境内社近くでは、多数の板石群と共に、「三嶋様」と呼ばれる大型火山弾も信仰の対象となっている点が興味深い(廣瀬一九八七)。なお、本社の三嶋大明神に薬師如来懸仏一点・刀劍三口、富賀大明神に和鏡三点以上・銅矛残欠、東國大明神に和鏡十二面・湖州鏡一面が奉納されている(三橋一九八一)。

大正十三(一九二四)年に行われた拝殿改築の際には、地下から八世紀代の須恵器大甕が出土した(稲村・豊島一九五八)。一方、富賀神社の本殿を西に降った海岸は、三本岳と称する東の大野原島や、北西の神津島などを望む富賀浜であり、富賀浜A・B遺跡の遺物包含層が存在する。同遺跡については、早くから古墳時代の土師器、古墳の副葬品と共通する勾玉・管玉・金環や、古代のカツオ加工に用いられたと考えられる塙形土器などの散布が報告されて

いた（稲村・豊島一九五八、橋口一九七五、永峯編一九八〇、橋口一九八八）。後出の資料としては、三宅島郷土資料館所蔵の奈良三彩残片が知られる（三宅村教育委員会二〇〇八）。

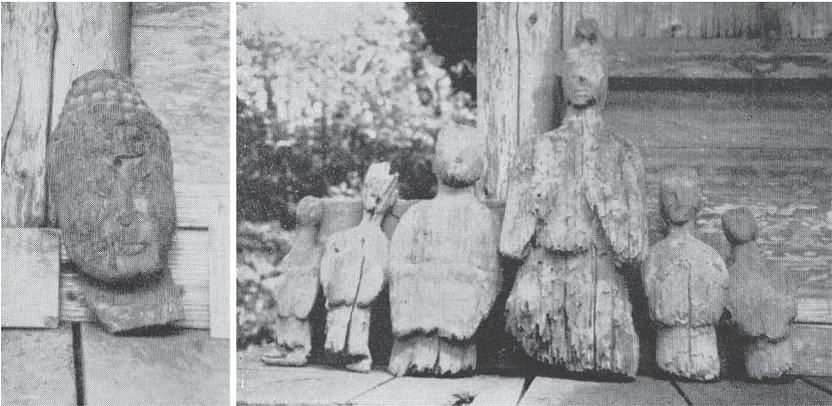
薬師堂・御祭神社境内遺跡

薬師堂・御祭神社は、東京都三宅村北西部の伊豆地区「堂之山」を境内としている。その内、東光山満願寺の名でも知られる薬師堂は、三嶋大明神の本地堂であり、元禄十二（一六九九）年造像の薬師如来像胎内から、平安時代末の所産と見られる木造仏頭残欠が発見された（丸尾一九五八、第二図左）。一方、「御最前宮」・「豊家太神宮」、或いは「奥の院」などと称されてきた御祭神社の由来については、殆ど伝えられるところがないもの（稲村・豊島一九五八）、一木造の古神像・仏像が、残欠・残片ながら十数躯も遺されていた（丸尾一九五八、第二図右）。なお、國學院大學所蔵の大場磐雄博士資料には、薬師堂所蔵とされる十二世紀後半の洲浜桜樹双雀鏡を写した拓影が収められている（深澤・石井編二〇一〇、第三図3）。

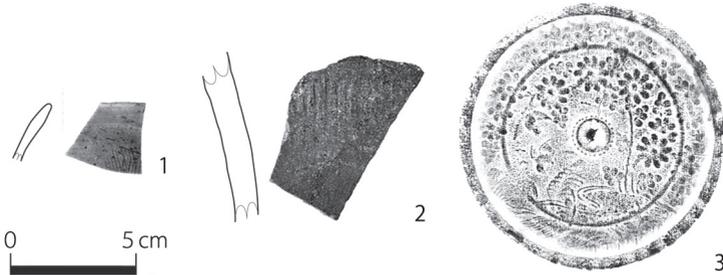
この境内では、南宋同安窯系の青磁碗残片と、渥美甕残片を各一点採集した（吉田編一九八二）。青灰色の釉を施した青磁碗残片は、口縁部から体部の一部を残すのみであるが、口縁端部から約2cmの辺りで内彎し、体部外面に細かい櫛目文を持つことから十二世紀後半に位置付けられる（横田・森田一九七八、宮崎二〇〇〇ほか、第三図1）。一方、外面に押印文帯が認められる渥美甕は、胴部片のみの遺存であるため厳密な位置付けが難しいものの、青磁碗と同じく十二世紀後半頃の所産と見ておきたい（第三図2）。なお、三宅島七島文庫に収蔵されていた過去の採集資料にも、ほぼ同時期に属する猿投周辺産の壺頸部一点が報告されている（橋口一九七五、内川・惟村一九九四）。

御笏神社境内遺跡

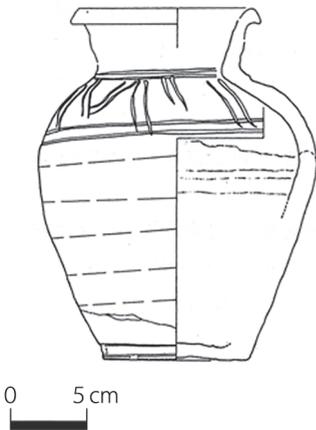
御笏神社は、東京都三宅村北部の神着地区「二山」一帯を境内としており、延喜式内社の佐伎多麻比咩命神社や、



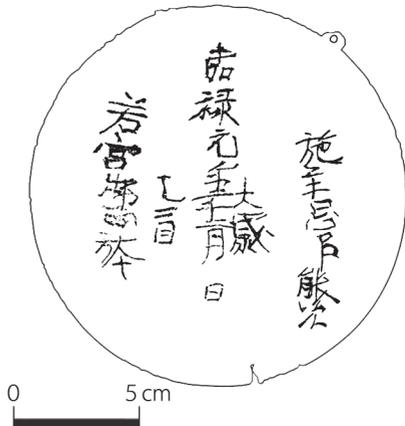
第二図 葉師堂・御祭神社 仏頭残欠・神像残欠



第三図 葉師堂境内遺跡 同安窯系青磁碗 (1) 渥美甕 (2) 州浜桜樹双雀鏡 (3)



第四図 御笏神社境内遺跡 渥美壺



第五図 白濱神社境内遺跡 御正鉢

『三宅記』に見える三嶋大明神の後、「八王子の御前」に相当する古社である。旧島役所である壬生本家に接する同社では、壬生家の祖である壬生御館が三嶋大明神から授かった「石のしゃく」を御神体とし、大明神が大蛇退治に用いた宝剣とされる「御太刀様」や、十三世紀前半から十四世紀前半にかけての和鏡十一面を保管する。なお、近辺には、観世音菩薩を祀る壬生久左衛門家の観音堂（広光山興濟寺）や、壬生久右衛門家の地藏堂などが集中している。

境内では、明治十六（一八八三）年に和鏡が採集された（橋口一九七五）。この和鏡に関しては、東京国立博物館の『埋蔵物録』綴にも、明治十八（一八八五）年二月の「第三号 伊豆国三宅島神着村御笏神社傍林ニ於テ発掘ノ古鏡不用ニ付警視総監へ返戻ノ件」が収録されており（時枝二〇〇一）、農商務省博物館において鑑定の上で返還されたものと見られる。但し、その出土鏡が、御笏神社保管鏡の何れに該当するかは、今のところ不明である。このほか、境内から出土した十二世紀後半の渥美壺残欠一点が（福田一九八九、第四図）、三宅島郷土資料館に収蔵されている。

（二） 神津島の遺跡

物忌奈命神社境内遺跡

延喜式内社の物忌奈命神社は、東京都神津島村の中部、西に前浜を望む丘の山腹に位置する。ここに祀られた物忌奈命は、『続日本後紀』承和七（八四〇）年九月乙未条に「伊豆国言。賀茂郡有造作島。本名上津島。此島坐阿波神。是三嶋大社本后也。又坐物忌奈乃命。即前社御子神也。」とある通り、三嶋神と、その本后である阿波神の子と位置付けられた。本殿南側の本地薬師如来を祀る薬王殿には、中世以前に遡ると見られる木造如来坐像一軀と、木造仏神像二軀が遺されている（水野・副島・瀬山・柴田二〇〇四）。

境内に顕著な埋蔵文化財の散布は認められず、度重なる地震や台風などの被害を受けて、旧来の遺物包含は深く

埋没してしまった。しかし、以前採集された資料の中に、猿投周辺にて生産された十二世紀後半の山茶碗系捏鉢残片が見られるほか、十五世紀後半の常滑甕も神社に保管されている（内川・惟村一九九四）。

（三）利島の遺跡

阿豆佐和気命神社境内遺跡

阿豆佐和気命神社は、東京都利島村北部の集落内に所在する。式内社に列した古社とされるが、何故か『三宅記』に関連記事が見られない。しかし、利島では、三嶋大明神の御子「預大明神」とも呼ばれており、后神「上下大明神」や父神に加え、多数の末社を擁している。現在、新たな覆屋に納められている旧本殿は、桁行の柱間を二間とする二間社流造であり（波多野一九九六）、棟札に「両社大明神」とあるように夫婦神として祀られていたらしい。

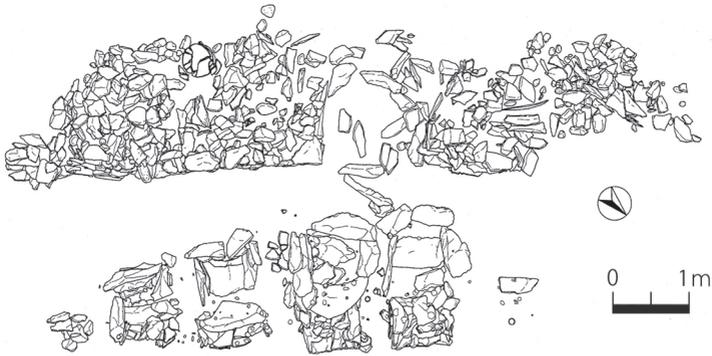
拝殿の南側に北面する祭祀遺構は、遺構・遺物が連続的に堆積しているため、厳密な時期区分が難しいものの、大きく見れば三段階の展開過程を見出すことができる（青木・内川・須藤編二〇〇五）。その内、Ⅰ期に相当する最下層では、板石を主体とする幅約九・〇m×奥行約一・八mの積石と、その手前に並列する板石組みの小祠五基が確認された（第六図）。これらの遺構や周辺には、十二世紀前半から十三世紀中頃にかけての和鏡八面、儀鏡二面をはじめ、双孔儀鏡・刀子・鎌・釘・銭貨などが伴う。陶器類は、十二世紀の常滑甕・渥美甕・渥美鉢や、外面タタキ目の特徴とする十三世紀前半の東播磨系甕などが見られる。続くⅡ期には、小祠群が半ば埋没し、積石も増築されていく。十二世紀後半から十五世紀中頃の和鏡三面を伴うが、何れも遺構外からの出土であった。陶器類は、十三世紀後半から十五世紀の常滑甕・鉢や、十五世紀から十七世紀の瀬戸・美濃製品が認められる。また、双孔儀鏡・刀子・釘や、多量の銭貨も出土した。Ⅲ期には、積石に板石・円礫が重ねられ、小祠が埋没した後の前庭部に遺物集中地点が二箇所

形成される。遺物集中は、何れも十六世紀後半から十七世紀前半に形成されたものと見られ、和鏡十八面や、柄鏡一面と共に、十五世紀から十八世紀の常滑・瀬戸・美濃の製品が見つかった。なお、表土の直下からは、和鏡一面のほか、被熱した和鏡残片・鰐口・仏飯具や、明治時代に降る御神酒徳利など、神仏分離に際して撤下された可能性の高い器物が出土した。

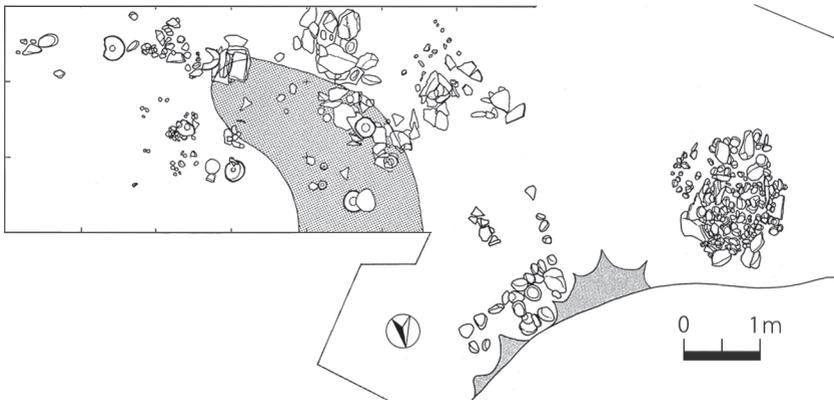
堂ノ山神社境内遺跡

堂ノ山神社は、明治年間の社堂合祀によって成立した新しい神社であり、島内の講が個々に祀っていた神明社・大六天社・熊野三社と、神宮寺社の四社で構成されている（郷田一九五九、加藤・西脇編一九九六）。しかし、阿豆佐和気命神社の北側に位置する境内地には、明治初年まで神宮寺社の前身と思われる葉師堂が存在した（深澤二〇一〇）。従って、堂ノ山神社境内から出土した埋蔵文化財については、三嶋大明神と預大明神の本地仏を祀る葉師堂関連の遺構・遺物と考えるのが妥当であろう。なお、堂ノ山神社には、社殿を改築した際に出土した十八面の和鏡と（稲村・金山一九五九）、境内北側の村道拡幅工事によって出土した和鏡九面、そして由来不明の伝世和鏡一面が納められていた（永峯・青木・川崎・内川一九九三）。これらの出土鏡が製作された時期は、およそ十二世紀から十六世紀に亘っている。

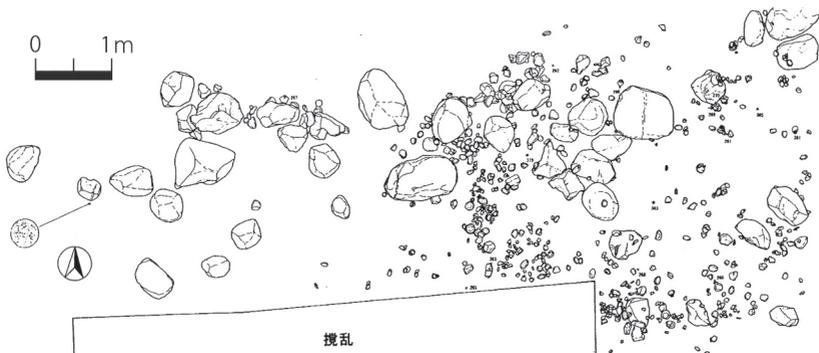
社殿北側の緩斜面では、五基の集石遺構と陶片集中区に伴って、十二世紀から十九世紀の遺物が出土した（青木・内川編一九九四、第七図）。板石や円礫を組んだ集石のみならず、礫が不規則に散在する遺構をも含んだ集石群の周辺には、異なる時期の遺物が重層的に折り重なっているため、遺構の具体的な形成過程を復元することは難しい。しかしながら、十二世紀後半から十三世紀に属する渥美・常滑の甕や片口鉢、瀬戸四耳壺などは、当遺跡における祭祀行為の開始期を示唆するものである。とりわけ、板石を主体とする第3号集石遺構からは、十二世紀後半から十四世紀



第六図 東京都利島村 阿豆佐和気命神社境内遺跡



第七図 東京都利島村 堂ノ山神社境内遺跡



第八図 静岡県三島市 三嶋大社境内遺跡 第3地点

前半に属する和鏡四面、多数の双孔儀鏡・鉄製品・錢貨や、十二世紀後半の常滑片口鉢、十五世紀前半の龍泉窯系青磁碗のほか、十三世紀から十五世紀を中心とする陶磁器類が出土した。また、タブノキの根元に円礫を配した第4号集石遺構周辺では、十二世紀後半の常滑甕や、十六世紀の和鏡一面をはじめ、鉄製品・錢貨が得られた。

(四) 伊豆半島の遺跡

白濱神社境内遺跡・火達山遺跡

白濱神社は、静岡県下田市長田地区の白浜海岸、即ち相模灘の南東に伊豆諸島を望む勝地に所在し、延喜式内社の伊古奈比咩命神社に比定される。三嶋大明神と、后神の伊古奈比咩命、そして大明神の眷属神である若宮・劔・見目を祀ることから、近世には「五社大明神」とも呼ばれた。また、三島市に所在する三嶋大社の本宮と位置付けられたため、「古宮山大明神」と称されたこともある。なお、康永二(一三四三)年の奥書を持つ『伊豆国神階帳』は、冒頭に三嶋大明神の一族を含む主要な神々を「正一位三嶋大明神／一品きささの宮／一品当きさの宮／正五位上第三王子并十八所御子達(後略)」と列挙する(三橋編一九九九)。伊古奈比咩命は、神津島の阿波神が三嶋神の本后を主張していることから、後后である「一品当きさの宮」に該当するのであろう。

これまで、同社を対象とした発掘調査は行われていないものの、境内において採集された埋蔵文化財が、社宝の一部として今日まで伝えられている(大場一九四三、内川・深澤・石井・田中編二〇一一)。文化九(一八一二)年に平田篤胤が著した『白濱神社略縁起』によれば、「(文化九年・引用者註)九月中に、五社の御正躰の御鏡、御社の奥山に是有るよし、神託によりて尋ね入りし處、果して老松の本に靈芝を生じて雨露を防ぎ、其の下より神鏡五面を掘出した」と言う。この「御社の奥山」とは、本殿裏の白濱神社境内遺跡古宮山地区(仮称)に当たるものと思われ、

嘉祿元（一二二五）年銘の御正躰一面、十二世紀後半から十三世紀後半の和鏡四面（一面亡失）に、双孔儀鏡一点を加えた鏡類が、「白濱大明神 御神鏡」と墨書された宝物箱に遺されていた。その内、鍍金された御正躰には、「施主忌部能次／嘉祿元年／大歳／十二月日／己酉／若宮御正躰」の線刻が見える（第五図）。また、拝殿北側からは、墨書礫三点と、北宋銭二点（亡失）が採集されており、礫石経塚である白濱経塚（仮称）の存在が知られる。

なお、境内北側の火達山は、旧暦九月二十日・二十一日に行われる例大祭の前夜、祭儀のはじまりを伊豆諸島の神々に告げる火達祭の場であったが、その西麓に位置する火達山遺跡では、伊豆半島北部を中心に分布する六～八世紀の駿東型甕や、十一～十二世紀前後のロクロ成形された土師質土器などが得られている。足立鋏太郎氏の記録には、「此處（火達山下…引用者註）は往古年々幾度かの祭典に用ひた土器を棄却した場所とおぼしく、約三尺を掘れば無数に破片を得られる。中には糸切製のものもあるによつて鎌倉時代に下るものもあらう。又大正七年二月十五日同地で完形の古銚一枚を拾ひ、今年二月七日また同質の鉄片を得た。」とあり（足立一九二〇）、供献具の散布状況が窺われる。

三嶋大社境内遺跡

『延喜式』所載の伊豆三嶋神社である三嶋大社は、伊豆半島の付け根に当たる静岡県三島市、黄瀬川扇状地の南端に所在する。「三嶋神」は、『新抄格勅符抄』が載せる大同元（八〇六）年の太政官課に、「伊豆三嶋神 十三戸伊豆国。宝字二（七五八）年十月二日九戸。同十二月四戸。」とあるのを初見とし、嘉祥三（八五〇）年に従五位上に叙された。神階は、阿波神・物忌奈乃神・伊古奈比咩神らと共に順次累進していく。延長五（九二七）年奏進の『延喜式』神名帳においては、伊豆国加茂郡条の筆頭に掲げられた。但し、ここ三嶋大社の地は、国府や国分寺などが置かれた田方郡の中核であつて、賀茂郡ではない。むしろ、現在の下田周辺に当たる賀茂郡「稲梓郷」が「大社郷」と改称した九世紀頃には、三嶋神と伊古奈比咩神を祀る社が白浜付近に存在した可能性が高い。一方、平家に対する

拳兵を決意した源頼朝は、治承四（一一八〇）年八月十七日の「三嶋社神事」に安達盛長を遣わして奉幣し、その晩に目代山木兼隆の館を襲っていることから、十二世紀の段階では国府付近の現在地に三嶋神社が迎えられていたようである（大場一九四三）。

考古学的には、境内東側の第1地点（客殿）・第2地点（社務所）と、西側の第3地点（宝物館）において発掘調査が行われてきた。主な遺構は、十三世紀から十四世紀を中心とするかわらけ廃棄土坑や、複数の建物跡や溝・土坑などからなる。その内、第2地点では、七世紀後半の竪穴建物跡が二棟確認されており、当地に祭祀空間が展開する以前の様子を窺わせる（鈴木編一九九〇）。一方、第3地点の東端に位置する祭祀遺構は、長径1mほどの巨石を数多く配置したものであり（辻編一九九六、第八図）、舶載品を含む若干の陶磁器類と、大量のロクロかわらけや、少量の白色系かわらけなど、十三世紀後半から十四世紀を主体とする遺物が伴う。完形に近いかわらけは、口縁部を上にした状態で出土しており、何らかの儀礼行為が行われた状態が、そのまま埋没している可能性も指摘されている。また、その東に位置する長径約一〇・四m×短径約四・〇mの第1号土坑は、大きく攪乱を受けているものの、大量のかわらけと、僅かな輸入陶磁器類が出土しており、儀礼に供された道具の廃棄坑と考えられる。

三、三嶋信仰の展開と『三宅記』

以上、伊豆諸島と伊豆半島における三嶋大明神関連の遺跡を瞥見してきたが、これらの遺跡が形成された過程には、大きく三つの画期を認めることができよう。その内、第一の画期は、噴火造島の現場である島嶼部にて「三嶋神」の国家的祭祀が開始された七世紀後半から八世紀にある。第二の画期は、地方に対する国家的な神祇祭祀が退転する中で、

半島部にて「三嶋神」に対する国衙祭祀の拠点が北遷していくとともに、本地を薬師如来とする観念が定着していった九世紀から十二世紀頃。第三の画期は、鎌倉將軍らが箱根山・三嶋社・走湯山に参詣する二所詣などの武家祭祀が興った一方、三宅島壬生神主家を核とする縁起物語『三嶋大明神縁起』の世界観が萌芽し、新たな宗教的動向が見られる中で、「三嶋大明神」に対する伊豆地域のローカルな祭祀形態が形成された十二世紀前後にある。

(一) 古代「三嶋神」の国家祭祀―第一の画期―

伊豆諸島における神祇祭祀の痕跡

ここで概観した三嶋神関連社堂境内遺跡の内、七世紀以前に遡る埋蔵文化財が確認されている事例は、三宅島富賀神社付近の富賀浜遺跡であった。三宅島における高塚古墳の存在は知られていないものの、古墳時代以来の祭祀遺物は、古墳に副葬された品々と共通している。勿論、先述した富賀浜採集の金環や玉類などを、直ちに富賀神社の淵源を示す根拠と看做すことは難しいが、同社境内周辺が古くからの祭祀空間であった事実は疑いない。

但し、七世紀後半の伊豆諸島では、大島の和泉浜遺跡C地点のように、土師器・須恵器のほか、鉄製武器・武具や、鈴釧・玉類などの装身具に加え、短冊形の金・銀製品といった、在地首長の独力では入手し得ない幣帛類を捧げた事例も現れている(内川・山本編一九九五)。続く八世紀には、式根島の吹之江遺跡・吹之江東遺跡でも(吉田ほか一九八七、吉田・前田編一九八七)、土師器・須恵器に加えて直刀・鏡形鉄製品などを奉げた痕跡や、立石などを伴う祭祀遺構が形成されており、伊豆諸島の現地における公的な祭祀行為が維持されていたことを示している。

噴火造島の神「三嶋神」と三宅島

これらの事例と時期的に並行する記録としては、『日本書紀』天武天皇十三(六八四)年十月条に、「伊豆嶋西北二面、

自然増益、三百餘丈、更為一嶋。則如鼓音者、神造是嶋響也。」と見え、未だ「三嶋神」の名は現れていないものの、白鳳大地震に伴う伊豆諸島の火山活動を、神の業と看做していたことがわかる。その後、「三嶋神」に合計十三戸の神戸が与えられた天平宝字二（七五八）年までには、『三宅記』が噴火造島神としても描いた三嶋大明神の原型が認識され、かつ国家的な神祇祭祀の対象と位置付けられていったのであろう。

なお、『三宅記』に三嶋大明神の「宮」が置かれたとある三宅島「あこ」が、遡って古代の国家的祭祀の場であったことを示す有力な資料としては、富賀浜採集の奈良三彩や、カツオ加工品の貢納に関わる埴形土器を取り上げておきたい。とりわけ唐三彩に倣った奈良三彩は、八世紀代を中心に製作された本邦初の施釉陶器であり、官衙・寺院跡や、祭祀遺跡の出土例が顕著なことから、国家的な仏事・神事に用いられたものと考えられる。福岡県宗像市の沖ノ島、岡山県笠岡市の大飛島、三重県鳥羽市の神島など、三宅島と同様な海島に所在する祭祀遺跡からも、多数の祭祀遺物と共に奈良三彩が出土しているが、何れも玄界灘・瀬戸内海・伊勢湾といった、国内外に向けた重要な航路上に位置する。このような富賀浜に近い富賀神社の境内では、同時期の須恵器なども発見されていることから、当社の濫觴を七世紀後半から八世紀前後に見積もっても大過無からう。三宅島や富賀神社について、三嶋大明神の本宮と主張する『三宅記』などの言説が、一定の説得力を以て迎えられた背景には、かかる前代以来の歴史的脈絡が存在したのである。

（二）「三嶋神」の国衙祭祀と神仏習合―第二期―

北遷する国衙祭祀

その後の三嶋大明神関連社堂境内遺跡では、今のところ九世紀から十一世紀頃までの埋蔵文化財に乏しく、再び顕著となる考古資料は十二世紀以降のものである。既に見てきた通り、かかる傾向は、各社堂の周辺にて発掘・採集さ

れた遺物は勿論、伝世考古資料も含めて一般的に認められた。伊豆半島にあつては、九世紀頃までに白濱神社、十二世紀後半以前に三嶋大社境内の祭祀空間が整備されたと推定されるが、その見通しを裏付ける埋蔵文化財は充分でなく、今のところ考古学的な追認を得ることは難しい。

静岡県下田市白浜の白濱神社は、后神を祀る式内伊古奈比咩命神社であり、三嶋大社の本宮として「古宮山大明神」とも呼ばれた。『和名抄』の記述によつて現在の下田周辺に当たる賀茂郡「稲梓郷」が「大社郷」と改称されたと推定される九世紀後半から十世紀初頭までには、伊豆の火山島群を遙拝する空間が整備されたのであろう。火達山は、旧暦九月の大祭前夜、祭儀のはじまりを伊豆諸島の神々に告げる火達祭の場であつたが、西麓に位置する火達山遺跡では、十一世紀から十二世紀頃のロクロ成形された土師質土器などが多数得られている。静岡県三島市大宮町の三嶋大社は、即ち伊豆三嶋神社である。『吾妻鏡』などに見る通り、賀茂郡に存した三嶋社が、十二世紀頃までに田方郡小河郷の国府附近にて祀られるようになったのは、いわば伊豆国の国府総社のような機能を期待されたことであろう。もともと、境内の発掘調査では、今のところ十三世紀以前に遡る状況は詳らかでない。

このように三嶋神が北遷してゆく様は、国司巡拝等における便を図つたものと考えられる。斯様な見通しを裏付ける考古学的裏付けは充分でないが、むしろ九世紀以降、朝廷の直接的な祭祀対象が畿内周辺に縮小していく傾向にも応じたものと解しておこう。

本地としての薬師如来

一方、三宅島においては、古代以来の祭祀空間である富賀神社に加え、御笏神社と薬師堂、或いはその前身施設が十二世紀後半までに形成されていく。このような、三嶋大明神・御子神を祀る社と、噴火造島の神がもたらした災害を慰撫する本地薬師如来（田島二〇一九）を祀る薬師堂のセット関係は、『三宅記』に殆ど関連記事の見られない

利島においても、三嶋大明神・預大明神を祀る阿豆佐和気命神社の境内遺跡と、薬師堂跡である堂ノ山神社境内遺跡の關係に見出される。埋蔵文化財以外にも目を向けると、三宅島の薬師堂・御祭神社では、遡って平安時代の所産と見られる薬師如来像や、神像の残欠が伝世している。また、神津島の物忌奈命神社に隣接する薬王殿や、「蔵王権現薬師十二神」と呼ばれる伊豆大島の薬師堂にも、同様の木造仏群が納められていた（内川二〇〇〇）。従って、これらの社堂では、発掘調査による建築遺構の確認は果たされていないものの、早い段階から神像・仏像を祀った建築物が伴っていた可能性が高い。このように、既に十二世紀後半までの段階で、後の『三宅記』に結実する本地垂迹観が、伊豆諸島各地に定着していた様子を窺うことができるのである。

（三）「三嶋大明神」像の分化と『三宅記』

武家祭祀と島嶼部のまつり

先述した通り、三嶋大社境内遺跡の祭祀遺構では、十三世紀後半を中心とする遺物群に、僅かながら白色系かわらが伴っていた。かわらけ自体、そもそも再利用を前提としない饗宴・儀礼用の器であったが、殊に京の製品を模した白色系かわらけは、鎌倉将軍による二所詣が行われた箱根権現・走湯権現の関連遺跡や、北条氏館であった伊豆の国市御所之内遺でも出土しており、鎌倉幕府・北条氏との強い結び付きを示唆するものとされる（池谷二〇〇四・二〇〇五）。実際、三嶋社は、その後も足利氏・後北条氏や、歴代の徳川将軍など、東国を押さえた有力者層の尊崇を受けていった。

片や、十二世紀後半以降の伊豆諸島では、利島の阿豆佐和気命神社境内遺跡例と堂ノ山神社境内遺跡例が端的に示しているように、小規模な集石や立石などを対象として、多数の鏡・金属製品・陶磁器類を供献する祭祀形態が近世

まで続いていく。このような祭祀行為は、三嶋大明神関連社堂の境内遺跡のみに見られる現象ではなく、南部伊豆諸島の三宅島・御蔵島・八丈島・八丈小島・青ヶ島では、考古学的に確認される積石遺構や、今日も祭祀対象となっている屋敷神などに共通して認められる（石井・深澤編二〇一二、深澤・石井編二〇一〇）。とりわけ、三宅島や八丈島では、中近世遺物を伴う積石遺構が多数存在しているが、何れも外形上は近似したものであり、それらが墓なのか、或いは屋敷神などの信仰対象なのか直ちに判断することは難しい。また、発掘調査事例が少ないため、積石遺構や、和鏡を伴う信仰形態が展開した過程についても充分明らかになっていないと言いつても言い難い面がある。しかし、走湯権現のような霊場や、三嶋社のような聖地の形成が進んだ十二世紀には、伊豆半島において多数の経塚が営まれるとともに（勝又二〇〇三）、経塚の副納品や、中世墓の副葬品にも用いられた和鏡が、大量に伊豆諸島へ持ち込まれ始めた（永峯・青木・川崎・内川一九九三）。かかる動向の中で、伊豆諸島の人々は、神々に対する祭祀と、死者への弔いに当たって、板状節理片や海岸転石を用いた積石・集石を営み、経塚副納品や副葬品と共通する和鏡などの品々を奉げたのである。ここには、神仏と祖霊の間に、画然たる隔たりを認めない靈魂観が示されているようにも思われる。

『三宅記』的世界観の形成

このように、三嶋社が有力者層の崇敬を集める一方、伊豆諸島では在地の独特な信仰形態が生まれ、近世まで維持されていく。実際、かつて富賀神社の経堂に納められていた経巻類の内、北朝応安三（一三七〇）年の『大方広仏華嚴経』巻第一（焼失）に、「三嶋本社富賀大明神宝殿」へ寄進するとの識語が認められることから（稲村・豊島一九五八）、少なくとも十四世紀半ば前後には、同社を三嶋大明神の本宮と看做す立場があった。同じ「三嶋大明神」の名で呼ばれる神ではあるが、『三宅記』に結実する「三嶋大明神」観は、ここに見てきた歴史的経緯の中で徐々に形成され、今日もなお伊豆諸島の民俗信仰に根を張り続けているのである。

ちなみに、白濱神社境内遺跡古宮山地区から出土した嘉祿元（一二二五）年銘の御正躰には、「若宮」の名が刻まれていることに気付く（第五図）。もつとも、この「若宮」については、若宮八幡を指す可能性も否定できない。しかし、前近代に白濱神社の末社であった若宮八幡宮は、そもそも社人が境外に祀っていた小祠である（大場一九四三）。そうすると、やはり同銘文に見える神名は、三嶋大明神の眷属神「若宮」と考えるのが妥当であろう。先に触れた康永二（一三四三）年の奥書を持つ『伊豆国神階帳』にも、新島に坐す「みちのくの大后」の御子と共通する「第三王子」の名が記されていたが、この十三世紀から十四世紀の段階で、『三宅記』所載の神々が確認できる事実は興味深い。

民俗誌としての『三宅記』—残された課題—

ところで、『三宅記』に登場する神々は、死して石神になるという。もつとも、石神への化身譚は、箱根・走湯の説話である『神道集』所載「二所権現事」にも見え、ここで殊更に取り上げることには疑念を抱く向きもある。しかし、三嶋大明神そのものであり、その御代官たる壬生家代々のレガリアでもある「石のしゃく」は、御笏神社の御神体（御石神か？）となっている。富賀神社では、大型の火山弾を「三嶋様」と呼んで敬ってきた。そして、南部伊豆諸島の島々では、むしろ在地の人々が特別に意識しないほど、集石・立石が神社境内や屋敷内に見られるのである。このような事例は枚挙に暇がなく、『三宅記』的な世界観と、考古学・民俗学的に把握される資料の実態が、全く無関係な状態にあったとは考えにくい。

また、様々な読み方のできる『三宅記』は、三嶋大明神／箱根の三姉妹が、蛇／鳥となって水底／山上へ追われるが、自然神・水神である蛇と同化し／蛇を切り、島を作る／村を分割する、という島々の起源神話と、三宅島の村落創成神話でもある（深澤二〇〇九）。そこで起源が語られている三宅島の集落は、伊豆・神着・坪田・阿古の四村

であった。ちなみに、三宅島に伝わる神楽歌にも、「四郷」・「四つの里さと」が歌われており（本田・宮尾一九五八ほか）、これらの物語や芸能は、何れも伊豆と阿古の間に伊ヶ谷集落が形成される前、即ち中世の所産であることがわかる。つまり、『三宅記』の存在を介することによって、通常ならば其時性を担保し得ない民俗芸能と考古資料を、同時代資料として取り扱うことが可能となるのである。本稿においては、主に三嶋大明神関連社堂の展開過程を概観する作業を通して、『三宅記』的世界観の形成について窺ってきたが、今後は民俗考古学的な観点も含めた新しい研究の理論化と、実践が期待されるのである。

謝辞

本稿は、去る二〇一二年に脱稿済みであったものの、故あって発表の機を逸していた「考古学から見た『三宅記』」を元にしてゐる。今さらながらではあるが、先んじて要約を発表してしまったので（深澤二〇二三）、多少の手直しを施した上で全文を公にしておきたい。具体的には、三嶋信仰の画期を二段階から三段階へと変更した。しかし、この方十三年に及ぶ研究の進捗については、殆ど反映できていない（田島二〇一九ほか）。ご容赦を乞うとともに、別稿を期す次第である。

摺筆にあたっては、ほくを三宅島へ誘ってくれた故吉田恵二先生、伊豆研究の先達である内川隆志先生、そして『三宅記』を考古学的に評価してみてもどうかと示唆して下さった三橋健先生に感謝申し上げる。お三方との出会いがなければ、ほくが三嶋さんと相見えることもなかったのだから。また、現地調査にあたっては、三宅島の壬生明彦名誉宮司、壬生貫則宮司、壬生友子権禰宜、伊古奈比咩命神社（白濱神社）の原嘉孝宮司に暖かく迎えて頂いた。ところで、この二〇二四年度末をもって、同僚の吉永博彰さんが一先ず助教の任期を終えられることになった。吉永さんとの議論の成果は、まだ充分咀嚼できてはいないけれど、ともに三嶋さんを愛する良き相棒との友情に本稿を奉げることにしたい。益々のご活躍を祈念するものである。

引用・参考文献

- 青木豊・内川隆志編 一九九四『堂ノ山神社境内祭祀遺跡』利島村教育委員会
- 青木豊・内川隆志・須藤友章編 二〇〇五『阿豆佐和氣命神社境内祭祀遺跡』利島村教育委員会・國學院大學海洋
信仰研究会
- 阿部美香 二〇〇〇『本地物語としての『三宅記』について』『文化史研究』四 昭和女子大学
- 阿部美香 二〇〇一『本地物語としての『三嶋大明神縁起』—その成立と機能—』『説話・伝承学』九 説話・伝承
学会
- 足立鋏太郎 一九二〇『白濱神社祭神論附來宮子神考』『國學院雜誌』第二六卷第六号・第七号
- 伊木寿一 一九五八『三宅・御蔵両島古文書類調査報告』『伊豆諸島文化財総合調査報告』第一分冊 東京都教育
委員会
- 池谷初恵 二〇〇四『東国境界域の白いかわらけ』『中世東国の世界2』 高志書院
- 池谷初恵 二〇〇五『伊豆国における白色系かわらけについて その2—二所詣との関わりから—』『静岡県考古
学研究』三七 静岡県考古学会
- 石井匠・深澤太郎編 二〇一二『八丈島・青ヶ島における「イシバ」の基礎的研究』『研究紀要』第四号 國學院
大學伝統文化リサーチセンター
- 稲村坦元・金山正好 一九五九『社寺史跡史料』『伊豆諸島文化財総合調査報告』第二分冊 東京都教育委員会
- 稲村坦元・豊島寛彰 一九五八『三宅御蔵島の社寺史跡その他』『伊豆諸島文化財総合調査報告』第一分冊 東京

都教育委員会

内川隆志 二〇〇〇「奈良・平安時代」『大島町史』通史編 大島町史編さん委員会

内川隆志・惟村志 一九九四「伊豆諸島の中世陶器―渥美窯・常滑窯の製品を中心とした新資料―」『紀要』第十輯 國學院大學考古学資料館

内川隆志・山本哲也編 一九九五「伊豆大島和泉浜遺跡C地点―第2次・3次調査の概要―」『紀要』第十二輯 國學院大學考古学資料館

内川隆志・深澤太郎・石井匠・田中大輔編 二〇一一「白濱神社所蔵考古資料調査報告」『研究紀要』第三号 國學院大學伝統文化リサーチセンター

大場磐雄 一九四三『伊古奈比咩命神社』伊古奈比咩命神社々務所

勝又直人 二〇〇三「伊豆国の経塚―周辺の国々と比較して―」『中世の祭祀と信仰』静岡県考古学会

加藤貴・西脇康編 一九九六「文献史料にみる利島」『利島村史』研究・資料編 利島村

郷田洋文 一九五九「ムラ人の信仰生活」『伊豆諸島文化財総合調査報告書』第二分冊 東京都教育委員会

鈴木敏中編 一九九〇『三嶋大社境内遺跡』I 三島市教育委員会

辻真人編 一九九七『三嶋大社境内遺跡第3地点』三島市教育委員会

田島整 二〇一九「静岡県河津町・南禅寺の平安時代仏像群について―尊像構成から見たその性格―」『年報』第37号 鹿島美術財団

時枝務 二〇〇一「近代国家と考古学―埋蔵物録」の考古学史的研究―」『紀要』第三六号 東京国立博物館紀要
土岐昌訓 一九八一「三嶋大明神縁起の成立背景」『神道宗教』第一〇五号 神道宗教学会

- 永峯光一編 一九八〇『東京都島嶼地域遺跡分布調査報告書』大島・三宅島 東京都島嶼地域遺跡分布調査団
- 永峯光一・青木豊・川崎義雄・内川隆志 一九九三「増補伊豆諸島出土・伝世和鏡基礎集成」『紀要』第八輯 國學院大學考古学資料館
- 橋口尚武編 一九七五『三宅島の埋蔵文化財』伊豆諸島考古学研究会
- 橋口尚武 一九八八『島の考古学』東京大学出版会
- 波多野純 一九九六「阿豆佐和氣命神社旧本殿」『利島村史』研究・資料編 利島村
- 廣瀬進吾 一九八七『三宅島史考』
- 深澤太郎 二〇〇九「三嶋神と『三宅記』のアルケオロジ―三宅島の中世積石塚と石神信仰―」『研究紀要』第一号 國學院大學伝統文化リサーチセンター
- 深澤太郎 二〇一〇「三嶋大明神と「薬師堂」のジオグラフィ―東京都利島堂ノ山神社境内祭祀遺跡の性格をめぐって―」『研究紀要』第二号 國學院大學伝統文化リサーチセンター
- 深澤太郎・石井匠編 二〇一〇「三宅島積石信仰関連遺跡分布調査報告」『研究紀要』第二号 國學院大學伝統文化リサーチセンター
- 二〇二三「考古学から見た三嶋神・三嶋大明神」『三嶋の神のモノガタリ―焼き出された伊豆の島々―』國學院大學博物館
- 福田健司 一九八九「三宅島・八丈島出土の壺」『学芸研究紀要』第六集 東京都教育委員会
- 本田安次・宮尾重男 一九五八「島の芸能―三宅・御蔵―」『伊豆諸島文化財総合調査報告』第一分冊 東京都教育委員会

丸尾彰三郎 一九五八「三宅御蔵島の彫刻」『伊豆諸島文化財総合調査報告』第一分冊 東京都教育委員会

水野敬三郎・副島弘道・瀬山里志・柴田泉ほか 二〇〇四「彫刻編」『東京都神津島進行関連文化財集中調査報告書』

告書』東京都教育委員会

三橋健 一九七八「三嶋大明神縁起」『紀要』第十六号 國學院大學

三橋健 一九八一「阿米都(和)氣命神社」『式内社調査報告』十 式内社研究会

三橋健編 一九九九『国内神名帳の研究 資料編』おうふう

三宅村教育委員会編 二〇〇八『三宅村郷土資料館』(パンフレット) 三宅島郷土資料館

宮崎亮一編 二〇〇〇『大宰府条坊XV—陶磁器分類編—』大宰府市教育委員会

横田賢次郎・森田勉 一九七八「大宰府出土の輸入中国陶磁について—型式分類と編年を中心にして—」『研究論集』

四 九州歴史資料館

吉田恵二編 一九八二『中郷遺跡』國學院大學考古学研究室

吉田恵二ほか 一九八七『吹之江遺跡』新島本村教育委員会

吉田恵二・前田光雄編 一九八七『吹之江東遺跡』東京都教育委員会

